

『現代教育科学』一九六六年六月（明治図書出版）

■後期中等教育改革プランの分析

今後予想される教育計画

矢口 新

一

三月二十九日付の新聞によると、文部省の中央教育審議会は四月二十八日の総会において「後期中等教育のあり方」に関する中間報告を可決して発表することになったようである。中教審は中間報告に関する各界の反響をみた上で九月中に文相に対する答申を行なう予定だという。

これまでの中教審の審議が従来の諮問に対するそれとはちがって異例といつてよいほど長い時間をかけていることからみて、この問題がきわめてむずかしい問題を含んでいることを思わせるに十分である。四月の発表がそれを物語るであろうが、それは中間報告だということからそれ以後においてもまた大きくかわることも想像されないことはない。中間報告を受けとって人々がどう反応するかが、またわが国の後期中等教育を大きく動かすともいえよう。現在の教育がその教育理念がどうであれ、受験体制下における教育という実態にあることは一般にも認められる事実となっている。それでもよいではないかという声は一部にもあるけれども、一般的には受験準備教育が幾多の弊害を生み出して、改善ないし改革を必要とする段階に来ていることを認める人が多いであろう。それに対してはどういう教育

計画が予想されるであろうか。

編集者から与えられた「今後予想される教育計画」という主題をわたしは以上のように解釈して述べてみたいと思う。

二

草案の内容については新聞に発表されたもの以外わたしは知らないが、具体的方策として、第一に高校教育の多様化ということが考えられているようである。これは一体どういうことであろうか。後期中等教育というものを義務教育終了後の数年の教育というように考えれば、この段階の教育をすべての青少年に対して拡充することは必然的に教育の多様化ということになってくるのであろうか。その場合の多様化とは具体的にいかなる姿のものとなるであろうか。

見ようによつては現在の高校にも多様なものがある。全日制あり定時制あり、通信制もある。職業課程もあれば、普通課程もある。職業課程にはさまざまなものがある。随分多様であるといえよう。さらに高校以外の同じ年齢段階の青少年が進む教育機関をみれば勤労青年学校というものもあり、文部省所轄以外の学校には職業訓練所もある。また各種学校というような技能を与えるさまざまな形態の教育機関もある。こうみると後期中等教育は十分多様化している。とすれば今問題になっている高校の多様化というのは何を意味するのであろうか。新聞にあらわれた限りでは、中教審のいう具体的方策としての所の高校教育の多様化というのはわたしにはよくわからない。何かごまかしがあるのではないかという気がする。

後期中等教育がかように多様化しているのは、あらゆる種類の青少年に教育の機会を与えるべく教育機関が整備していることだといえないことはない。そこへ入ってこないのは青少年に向学心がないからである。だからすべての青少年に教育機会を与えるということはそれらの機関になんとか収容しようという努力をすることである。それはどれ位かといえ、

だいたい義務教育の終了者の一五%たらずであろう。つまり義務教育終了後高校に入るものが七〇%以上、残りの半分が多様な教育機関で教育を受けていると考えられるから、後の半分のもの、つまり一五%足らずの者の教育を考えればよい。これは制度の問題というより、その運営の問題であるといえるかもしれない。かくして後期中等教育は現在の制度で十分であるということになる。制度問題は解消して運営問題が残る。

しかしこまったことがあるのである。それは現在の高校に成績のわるい者が多いのである。つまり現在の高校教育内容はそれらのものにとって程度が高すぎるのであろう。もつと程度の低い内容を与えてやってもよいのではないか。とくに定時制、通信制を全日制とくらべると非常に成績がわるい。もつと程度を上げてやれば成績もあがるかもしれない。そうすれば全日制もまたその中の成績のわるいものを救うことができるであろう。これは高校教育を多様化するという以外にないわけである。

もう一つの問題は高校以外の学校に入るものと、どここの教育機関にも入らないものがあることである。高校以外の学校ないしそれに似た教育機関に入るものは、それらの教育機関を学校体系にとり入れるかそれとの関連をつけてやるのが考えられようし、全然教育機関に入らないものは現在もあるが、青年学級などを多少整備した学校体系の中に何等かの関係をつけてやる。

これは後期中等教育という十五歳から十七歳段階の青少年に対する現在の教育体制の整備拡充になるという考え方もあるが、果たしてこのような考え方でよいのだろうか。なるほど数年をかけて練りに練ったものであるから、この整備拡充計画には十分自信があるのであろうが、問題は後期中等教育問題というのはこのような拡充整備で終わる問題なのであろうか。すべての青少年に教育の機会を与えるという方針を生かす教育計画としてこれでよいのか。

後期中等教育計画としてもたなければならぬものは何であろうか。その

辺から検討しなくてはならぬ問題がありそうな気がする。

三

後期中等教育問題の基本はすでに七五%になんなんとするものが高等学校の教育を受けているという事実があつて、あとの少数の青少年をどうするかという問題である。どうするかというのは妙ない方だが、十人のうち八人ないし七人が入るということになるかとあの二人ないし三人をしめ出すという体制があるとしたらおかしいことである。試験をして入れない者をふるいおとすという性格の学校ではないのである。だから昔の中学校とは根本的にちがう性格の学校に事実なっている。あるいはもしなっていないければ切りかえなくてはならないことである。それでなければいまの高校が存在することと自体が矛盾なのである。つまりもう十人のうち八人ちかくが入っているのである。だから十人のうち十人が入る教育機関になるべきであつて、そういうものとしてこの教育機関を考え直すし、そうしてすべての青少年をそこで教育することにするということなのである。

計画の基本はそこにおかるべきものである。それが後期中等教育問題であり、すべての青少年に教育の機会を与えるということだが、ただ教育の機会を与えるのではなく、後期中等教育を与える計画たるべきであり、その後期中等教育というのは、すでに十人中八人近くが現に高校教育を受けているという事実の上で考えられるべきことなのである。

いいかえれば、高校に入らない者が依然としてあるということではお話しにならないではないかということである。そういう計画では計画にならない。つまりこうなったら高校教育の義務制を考えるか、実質的に高校全入を実現するかしか手はない。そして問題はこれを何年かかって実現するかということが教育計画となるべきであらう。教育計画というものの最低の要求がそういうものでなければならぬ。

そういう観点から今回の整備拡充計画をみると、どうもその辺がきわめて低調のようである。新聞記事だけから察すると、まったくちがった構造の計画、つまり現状肯定の線をほとんど出ていないようにみえる。

高校の多様化というのは、高校全入の上に立って考えられなければならないのである。その点は今後の具体策でどう出るのだろうか。整備拡充の方針をみると、この辺がはつきりしない。各種学校や勤労青年学校や、職業訓練所などをどういう形で高校全入という完成体にまでもってゆくのか。少なくとも四、五年の間には社会自体の方がそれを必要としてくることは必至であると思うが、どうも拡充整備の方針にはそういう基本的方向がみられない。

四

高校全入ということになると教育を受ける能力のないものを教育するのは不経済だという論があると思う。これまでの長い間の中等教育はそういう考え方でつくられたものである。現在でもすでに高校に入っているがその教育を受けられない者が半数位いるのではないかという人もいる。つまり多くの生徒が入るようになったから教育をきりかえるべきなのにきりかわっていないからそういう現象がおこるともいえる。また反対に教育を受けるに値しないものが入ってきているという考え方もある。そういう考え方なら高校を半減する方向へゆくべきであるが、そういう考え方はもう無意味であろう。となると高校の教育をきりかえる以外にはないのである。そもそも教育を受ける能力がないなどという人間がいるであろうか。すべて教育を受けるに値するのである。その人間に適した教育を受けるに値するのであって人間を主にして考えればさまざまな人間に合う教育が実現しなくてはならぬ。これが教育の多様化ということであろう。

多様化という考え方が出てくる地盤は以上のようなことである。教育を受ける能力がないというのはある種の教育についていえないことも

ある。これこれの教育はこの人間には向かないということである。だからすべての人間を教育しようと思えば、それを教育するにたるだけのエネルギーを学校側がもたなくてはならぬ。これには向かないが、これには向くというように考えれば、あらゆる青少年がなんらかの教育を受けうるのである。そしてそれはもう三カ年位の後期中等教育とならなくてはならぬというのが現在の情勢であろう。多様化ということがこういうことを意味しなければ意味をなさない。その点から考えても今度の拡充整備方針がすつきりしないものをもっている。

もし真に多様化を考えるなら、たとえば勤労青少年として企業の中で教育を受ける者は当然高校教育を受けていることになるが、そういうものをどうして全体として後期中等教育体制としてゆくかについての基本的計画がなくてはならぬ。これはもはや今の文部省のわくの中での教育計画では実現しにくいことであろう。そういう点に今度の方策がどの程度迫っているか、その辺の計画がいかにあらわれるかは重要なポイントになるであろう。しかしどうもそういう計画になりそうではない。

高校の多様化というのは、今の高校以外の教育機関に高校とおなじようなエネルギーをかけるという努力をすることである。もちろん今ある画一的教育となっている高校をもっと青少年の適性に合わせて教育しうるようそのエネルギーを増強しなくてはならない。カリキュラムの多様化、単位制の拡充というようなことは最低必要なことであろう。端的にいえば後期中等教育のあり方についての根本問題はこの点だといってもよい。つまり勤労青年教育、あるいは定時制、通信制などに対していかに全日制以上のエネルギーを注ぎうるかということである。この観点がはつきりしなければ、大した教育計画は生まれえないといつてよい。

全日制の普通科が一番まっとうな教育機関であり、定時制や通信制はいわば救済策でまづい形の教育であり、優秀なものは全日制に入って教育を受けるべきであり、事実そうなっているという考え方には、恐ろしく古い

教育観が残っているのである。この点が一番わかりにくいことであるが、現代の後期中等教育が現在のような形で存在し、それが問題をもっているのはこの点に原因があるのである。こういう考え方をしておけば、結局受験教育を推進することになる。

五

いったい教育というのは働きながら教育を受けるのが最もよい教育になる。働くことの中に物の考え方も育ち、知識を使うことも会得する。自信も生まれるのである。その教育を拡充しなければ本当の教育は生まれないのである。今は働くこと、教育を受けることは全然別個で、働きながら教育を受けるのは本当は望ましくないと考えられているが、ここに誤りがある。この考え方が学歴主義を生み出しており、それがあからますます受験準備的教育が生まれ、ただ学歴をとるための教育となり、教育の中味が問題にならないのである。

後期中等教育の大きな問題の一つは、教育内容を働く世界からきりはないとして、百年來定型化してきた観念教育をどう改めるかという問題である。つまり時代が進歩して、新しい能力を必要とするようになってきている。その能力を開発するのは働く世界の中から何が必要なものかをもう一度改めてくみ直してこなくてはならない。つまり教育課程を根本的にくみかえることが絶対に必要になっている。これは現在の教育課程審議会のようなシステムでは到底不可能であろう。基本的な研究の積みあげが必要なので、相当な組織を必要とする。

そういうことを実施する基本的な方針となるものは勤労の生活と教育とを結びつけること、働く世界の中の教育を本格的につくり直すということである。それができなければ後期中等教育の教育内容は成立しないということである。

こういうことをいうとそれは進学者の教育と関係がないようにすぐ考

えるが、それが誤りである。大学教育もすでに八百近くの大学が存在して、明治の大学とはちがっている。かりにそうでなくとも、大学教育は、働く世界の実態を基盤にしてつくられなければならない。高校教育もより然りである。高校時代に働く世界と関係のない観念教育をうけていたのでは、とうてい大学の教育を受けても本当の働く人間にはならない。働く世界がいかなる知力、人格力を必要とするかを改めてみ直して、そこから後期中等教育がいかなる基礎的能力を開発すべきものであるかを明確にしなければならぬ。

このような方向は相当にきびしい考え方の転換を必要とする。いいかげんな対策では到底ものになるまい。つまり新しい意欲的な実践と、それに伴う研究とが一体となって、新しい後期中等教育計画をつくりあげることになるのである。それもしかしいくらか長くともここ十年間位に実現しなくてはならぬとすると、具体的な教育計画はなかなかむずかしいものになる。思いきった革新的な方向をもちながら、現実的には非常なおくれのある教育の実態、体制をどのようにもってゆくのか。勤労青少年教育の飛躍的拡充というような方針がどうも希薄である今回の中間報告にはあまり多くを期待できないような気がする。

今後予想される教育計画という主題について基本的な点だけを述べるにとどまったが、それだけこの後期中等教育問題は根本的な教育改革の問題として受けとられなければならないものをもっているのである。その点がよほどはつきり認識されないと、思いつきの計画になる恐れがあるということである。

〈プログラム教育研究所長〉